
冬のオアシス

吉野真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬のオアシス

【Nコード】

N1067P

【作者名】

吉野真人

【あらすじ】

大学生の祐司は、離婚した姉と暮らしていた。ある冬の夜。

「寒ぶっ」

青笹佑司は、廊下を吹きぬける冷たい風に思わず身体を震わせた。北側に位置しているせいか、アパートの廊下は寒気がする。明るい月の光さえ凍てついているように感じられた。鍵を開け、冷たいドアノブを回す。

「ただいま」

「お帰り、佑司」

姉の佑子が、柔らかな笑みを浮かべて立っていた。すらりと背が高く、肌の色は抜けるように白い。優しいな瓜実顔をしているためか、どこか、おっとりとした印象を与える。自慢にしていた長い黒髪を、ばつさり切ってショートカットにまとめていた。似合っているとは言い難い少し大きめの佑司のセーターが、なんとなく微笑ましい。

「寒かったでしょう」

「うん、今日は特に寒いよ」

誰もいない暗い部屋にただいま、というのが習慣になっていたが、誰かに出迎えて貰えるというのも悪くなかった。

「御飯、出来ているわよ」

「お、サンキュ」

「居候だから、これくらいはしなくちゃ」

大学生の佑司のアパートに離婚した姉が転がり込んできたのは、先月のことだった。3年前に結婚した夫との間が上手くいっていないことは佑司の耳にも入っていた。実家に帰るはずだったが、佑司は姉が苦勞をしたことを聞いていたので、出戻りに五月蠅い田舎に帰れ、とも言えなかったし、別に姉がいても構わない、と思っていた。

「おつ、うまそうだ」

机の上には二人分の夕食が湯気を立てている。カレイの煮付けに、ホウレン草の御浸し、漬物、湯豆腐、黄韭とモヤシの炒め物、味噌汁、御飯。きちんとした晩の食卓らしい食卓だった。

「姉ちゃんがきてくれてから、助かるよ。ようやく、まともな飯にありつける」

佑司は自炊していたが、自分で作るのは肉野菜炒め程度で、バイト先の賞味期限切れ寸前のコンビ二弁当か、安い学食で済ませるのが常だった。

「ちよつとボリュームが足りなかったかしらね」

「いや、充分さ」

「今度は、洋風の料理も作ってみるわね。あの人、和食が好きだったから、つい、和食ばかりに……」

佑子は急に口をつぐんで、食卓に目を落とす。

「もう、アイツのことはいいじゃん」

「ええ……」

「さ、食べようぜ。せっかくの料理が冷めちまうよ」

佑司は、自分でもわざとらしいと思いつながら、カレイの煮付けに箸をつけた。

「旨い」

「そう、よかった。練習した甲斐があったわ」

微笑む姉が痛々しく思える。

姉ちゃんみたいな嫁を貰っておきながら、いたい、何が不満だったんだ……母親から聞いた話だが、佑子は夫にしてもいない浮気を疑われたことに端を発し、一方的に責められていたという。

大学のことや、バイトのこと、友達や先生の話など、当たり障りの無い話をする佑司に相槌を打ち、時々、自分の学生時代の思い出話をする佑子。

「佑司と、こうやって話すのも、もう随分なかったわね」

「そうだよな」

姉とは小学生の時は、一緒に遊んだりしていたが、佑司が中学に上がる頃になると、優等生の姉が次第に疎ましく感じられた。別に親に代わって小言を言うわけではなかったが、県トップの名門校に行き、優等生で大人びた姉は、佑司にとって無言の圧力だった。姉が大学のために一人暮らしをした時はホッとしたものだった。

「中学生くらいになると、さすがに、お姉ちゃん、お姉ちゃんとは言ってくれなくなるから仕方ないけど」

「俺、そんなに、姉ちゃんと仲良かったっけ」

照れ隠しにわざと忘れたふりをする。小学生の頃は、よく手を繋いで遊びに出かけたものだった。姉の友達の家にまでついていき、冷やかされたこともあった。

「えー、忘れちゃったの？ 冷たい。どこに行くにも一緒だったじゃない」

佑子は形の良い唇を尖らせた。

一ヶ月前に比べ、随分明るくなったと思う。

ろくに口を利かず、部屋の隅にうずくまり、少しの物音で怯えていた。悪夢にうなされ、眠れずに睡眠薬をよく飲んでいた。煙たいほど大人っぽかった、あの姉とは思えないほどの変わり様だった。

TVを見たり、レポートを仕上げたりしているうちに、もう10時過ぎになってしまった。

風呂の準備は佑子がしてくれた上、一番風呂まで譲ってくれた。

佑司は、姉に家事全般を押し付けているようで、少々心苦しかった。実家にいた時もよく母親の手伝いをしていたが、今は立ち振る舞いや雰囲気まで「奥さん」という感じだった。

浴槽に身を沈め、身体の芯から温まらせてくれる湯に浸かる。出鱈目な鼻歌が、なぜか、出てきた。

「お湯加減、どう？」

「ああ、ちょうどいいよ」

昔は、姉ちゃんと一緒に風呂に入ってたな。

石鹸が目に入ると嫌がる佑司の髪の毛を洗う姉がなんだか嬉しうだったことをおぼろげに覚えている。男女の区別さえも曖昧だった無邪気な時期は、すぐに過ぎてしまったが。

風呂上りの牛乳を飲んでいると、携帯が鳴り響いた。扉の向こうから、ポップスの着メロが流れてくる。携帯を洗面所に忘れてきたことを思い出した佑司は、反射的に洗面所の扉を開く。

「きゃっ！」

間の悪いことに、ちょうど佑司は風呂から上がっていた。バスタオルで身体を隠した佑司が背中を向ける。携帯の着メロは既に途絶えていた。

「あ、姉ちゃん、ごめん……」

慌てて、目を反らそうとした佑司は、思わず我が目を疑った。真白い背中に茶色の染みがある。火傷の跡だった。

「姉ちゃん、これ……」

「あ、うん、ずっと前、お湯を被っちゃって……」

顔だけ佑司の方に向けて、取り繕うように言う。だが、佑司には火傷の跡と姉の表情が何を意味しているか、はつきり、嫌になるほど分かった。

「違うだろ……」

佑司の声に、目を伏せる佑子。

「アイツだろ、アイツがやったんだろ。こんなことまで！」

離婚した夫が、姉に暴力を振るっていたことは知っていた。足や腕に青痣があつたし、両親や親戚も噂していた。だが、熱湯をかけられたことまでは知らなかった。一歩間違えれば殺されていたかもしれない。

畜生、アイツ、ただじゃおかねえ……

「違うの！あの人とは関係ないの！」

否定すればするほど、佑子の表情は佑司の想像を肯定してしまっていた。

「もう、いいから……」

「だからって、このまま黙ってろって言うのかよ!」

「佑司まで、恐い顔しないで、お願い……」

「あ……」

顔を背ける佑子。細い肩が小刻みに震えていた。怒りが急速に冷え切っていく。今、姉を追いつめているのは、別れた夫ではなく、佑司自身だった。

「ごめん……」

テーブルを片付けて、二人分の布団を敷く。合宿のようで、姉がきた直後は新鮮に感じたが、今はもう慣れていた。少し冷たい布団に潜り込んで電気を消す。

「ねえ、佑司」

「何？」

「迷惑じゃない？ 私がここにいて。せっかくの一人暮らしなのに。佑司だって、彼女とか友達とか部屋に呼びたいでしょう」

「今、彼女はいないし、オレのアパート狭いから、友達もあんまり来たがらないよ」

「でも、やっぱり、長居するのめどうかと思うし……私……」

姉ちゃん、こんなに気が弱かったのかな。

なんでも器用にこなす上、落ち着いた性格だったのに、今は道に迷った小さな子供のようなだった。

「好きなだけいろよ。ていうか、いて欲しい。だって家事全般、俺がやらなくて済むんだぜ？ 実家より楽だ」

わざと、おどけた感じで言う。

「ありがと」

「おう」

佑司は、目を閉じた。姉が自分の側を選んでくれたことが意外だったし、うれしかった。

不意に佑司の手が暖かい感触に包まれる。驚いて目を開ける。

姉の手だった。

「どうしたんだよ。急に」

「昔、家族で旅行に行った時のこと、覚えてる？」

「ああ」

「朝まで手を握っていられたかって、ゲームをやったじゃない？
またしない？」

結果がどうなったかは憶えていないが、そんな他愛の無い遊びをしたことは忘れていなかった。

「いいよ」

佑司は佑子の手を握り返す。

急に子供の頃に帰ったかのようにだった。

「お休み、佑司」

「ん、姉ちゃんも、お休み……」

掌の儚い温もりが、ひどく愛しく感じられる。

また、元気に歩けるようになるまで、傷が癒えるまで、姉ちゃんは、ここで、ゆっくりと過ごせばいい。ここには、姉ちゃんを傷つける奴なんていない。もし何かあっても必ず、俺が守ってやるから

……

佑司はそう思いながら、眠りに落ちていった。

（後書き）

姉もの。少し暗めですけれども。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1067p/>

冬のオアシス

2011年2月13日14時40分発行